

輸出数量に復調の兆し、貿易収支は改善持続へ（12 月貿易統計）

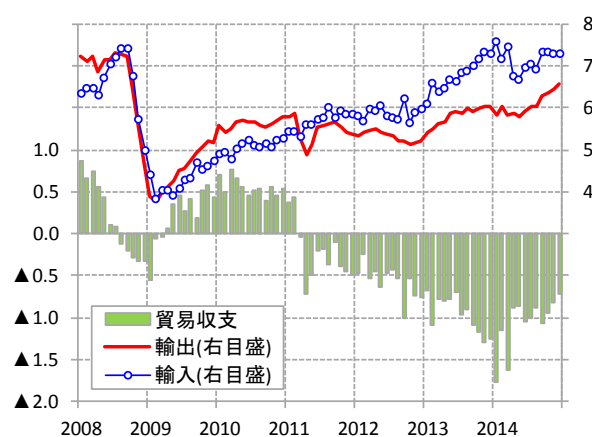
10～12 月期の貿易収支は赤字縮小が明確に。①円安進行に伴う日本製品の価格競争力改善、②自動車などの海外生産シフトの影響が一巡し始めたこと、③東南アジアの景気持ち直しを主因に、輸出数量が底離れの動きとなった一方、輸入数量が鉱物性燃料やコンピュータ、自動車を中心に伸び悩み、それぞれ貿易収支の改善に寄与した。これにより、10～12 月期の実質成長率（前期比）に対する外需寄与度は、7～9 月期の+0.1%Pt から上昇したと見込まれる。

貿易収支の改善傾向が明確に

昨年 12 月の輸出（6 兆 8,965 億円）は前年同月比+12.9%と 11 月の+4.9%を上回り、2013 年 12 月以来の 2 桁の伸びとなった。また、輸入（7 兆 5,572 億円）が同+1.9%と、11 月の▲1.6%からプラスには転じたが、輸出を大幅に下回る伸びとなった。このため、貿易収支の赤字幅は前年同月の 1 兆 3,072 億円から 6,607 億円へほぼ半減となった（いずれも速報値）。

季節調整値で見ても、12 月の輸出は前月比+2.0%と 7 ヶ月連続の増加となった一方、輸入は+0.1%と辛うじてプラスを確保する程度にとどまったため、貿易赤字は 11 月の 8,325 億円から 12 月には 7,121 億円へと 3 ヶ月連続で縮小した。

輸出入と貿易収支の推移（月次、季節調整値、兆円）



（出所）財務省

これにより、昨年 10～12 月期の季節調整値ベースの貿易収支は、輸出が前期比+5.8%と 7～9 月期の+4.3%から増勢を強めた一方、輸入が+1.1%と 7～9 月期の+2.4%から減速したため、赤字額が 2 兆 4,859 億円と、7～9 月期の 2 兆 9,444 億円から縮小した。1～3 月期の 4 兆 5,459 億円から見れば 2 兆円強の縮小となった。貿易収支は、輸出の持ち直しと輸入の伸び悩みにより赤字縮小傾向が明確になってきている。

10～12 月期の輸出：円安効果が数量面にも波及し始めた可能性

10～12 月期の輸出は前年同期比で+9.2%と、7～9 月期の+3.2%から増勢が強まった。これを価格要因と数量要因に分けて見ると、価格が 7～9 月期の+2.8%から 10～12 月期には+6.7%へと円安進行に伴い伸びを強めたほか、数量も+0.3%から+2.4%へと増勢が強まった。

この数量の増加について仕向地別に見ると、米国向け（7～9 月期▲2.7%→10～12 月期+1.4%）、EU 向け（▲0.2%→+1.0%）がともにプラスに転じたほか、アジア向け（+0.7%→+1.2%）が堅調に拡大した。さらに、米国・EU・アジア向けの伸びがいずれも全体平均を下回ったことから、中南米向けなどの増勢も強まったと推察される。全体的に、円安に伴う輸出押し上げ効果が数量面にも及び始めた可能性がある。加えて、米国向けでは、12 月ごろから自動車などの海外生産シフトの影響が一巡し始めた可能性も窺える。

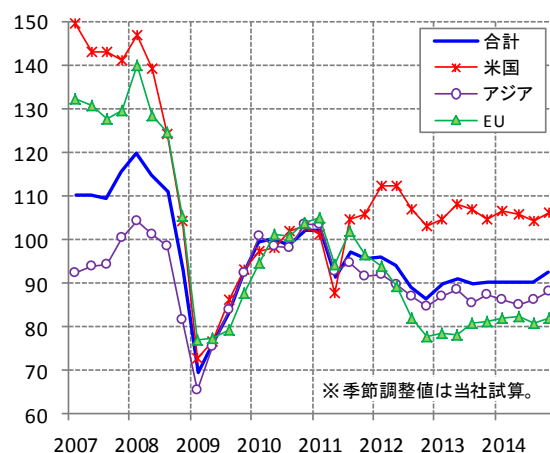
本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、伊藤忠経済研究所が信頼できると判断した情報に基づき作成しておりますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。記載内容は、伊藤忠商事ないしはその関連会社の投資方針と整合的であるとは限りません。

なお、アジア向けについては、中国向けが前年同期比▲6.0%と5四半期ぶりのマイナスに転じたことを踏まえると、ASEAN 向けや NIEs 向けの増加が全体を押し上げたと考えられる¹。そして、その中国向けについても、昨年10～12月期の前年同期比+16.2%という大幅増の反動が含まれていることを勘案する必要があり、当社試算の季節調整値によれば、前期比+0.1%と1～3月期からの落ち込みに取り敢えず歯止めが掛かった格好となっている。

また、季節調整値で見た対世界の輸出数量は、7～9月期の前期比+0.4%から10～12月期には+2.2%へと伸びが加速したと試算される。仕向地別に見ても、対米国（7～9月期前期比▲1.6%→10～12月期+1.8%）、対EU（▲2.1%→+1.7%）、対アジア（+1.5%→+2.2%）となり、上述した前年同期比の動きと概ね同様の示唆が得られる。

以上より、輸出数量は、①円安進行に伴う日本製品の価格競争力改善、②自動車などの海外生産シフトの影響が一巡し始めたこと、③東南アジアの景気持ち直しを主因に、底離れし始めたと評価できよう。

仕向地別輸出数量の推移（季節調整値、2010年=100）



※季節調整値は当社試算。
(出所) 財務省、伊藤忠経済研究所

10～12月期の輸入：鉱物性燃料を中心に伸び悩み

10～12月期の輸入は前年同期比+1.1%と、7～9月期の+2.4%からさらに減速した。品目別金額の前年同期比を見ると、原油や石油製品をはじめとした鉱物性燃料（2013年度シェア34%、7～9月期前年同期比+2.5%→10～12月期▲9.6%）が大きく落ち込み、全体を下押しした。

また、輸入全体について価格要因と数量要因に分けて見ると、価格（+3.1%→+4.8%）が伸びを強めた一方、数量（▲0.6%→▲3.5%）のマイナス幅が2009年10～12月期以来の大きさまで拡大²した。原油などの国際商品市況が悪化している中での輸入価格の騰勢加速は、円安の影響がより強く影響したと考えられる。一方、数量について品目別に見ると、原油（▲6.1%→▲9.0%）や石炭（▲1.4%→▲6.0%）の減少率が広がったほか、LNG（+4.3%→▲3.3%）やLPG（+4.5%→▲10.4%）がマイナスに転じるなど、数量ベースでも鉱物性燃料の落ち込みが目立った。また、資源以外では、電子計算機類（コンピュータ、▲15.9%→▲22.6%）の減少ペースが加速したほか、自動車（▲8.1%→▲2.2%）が3四半期連続のマイナスとなった。

10～12月期成長率に対する外需寄与度は上昇した見込み

以上見てきたような輸出入の動きは、10～12月期の実質GDP成長率³の外需（純輸出）の寄与度が、7～9月期の+0.1%Ptから上昇したことを示唆している。当社は今月末に、この外需寄与度も含めた10～12月期GDP・1次速報値の予測を公表する予定である。

¹ 今回の速報では、対NIEsや対ASEANの輸出数量は未公表。

² 当社試算の季節調整値では、7～9月期の前期比+0.5%から10～12月期には▲1.1%へと減少に転じた。

³ 2月16日に内閣府が1次速報値を公表する。

貿易収支の先行き：改善傾向が続く見通し

貿易収支の先行きについてであるが、基本的には、海外需要の持ち直し（米国堅調、ASEAN 復調）に加え、円安に伴う価格競争力改善および円建て価格の嵩上げ、海外生産シフトの影響一巡により、輸出の持ち直しが続く一方、資源価格の下落、緩慢なペースでの国内景気の回復などにより輸入が伸び悩むことから、貿易赤字の縮小傾向が続くと予想される。

ただし、中国経済減速の影響が輸出を抑制する可能性や、資源価格下落に伴う資源国経済の悪化リスクには引き続き注意していく必要がある。

一方、一段の円安などに伴い、高級品分野など一部の品目で国内回帰の動きが広がる可能性もある。その場合には、輸入がさらに抑制され、貿易収支の改善ペース加速につながることもなろう。